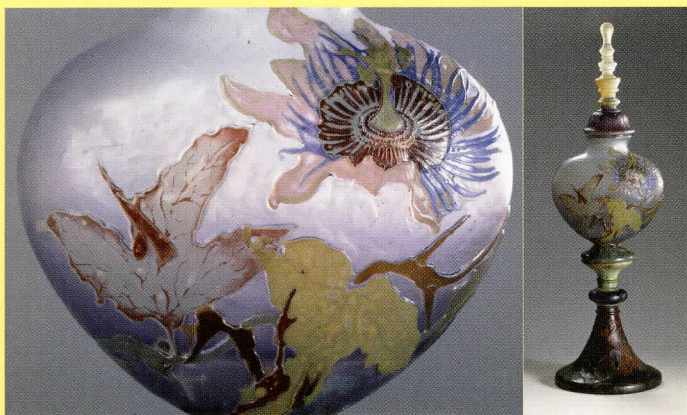


Civimoto 13

し び の ー と

高松市美術館
ボランティア通信
2006年4月1日発行



エミール・ガレ「花器《トケイソウ》」1900-02年頃
©text, photo, The State Hermitage Museum, Saint-Petersburg, 2006

エルミタージュ美術館秘蔵

エミール・ガレとドーム兄弟展 フランスからロシア皇帝への贈物

4月28日(金)～6月11日(日)

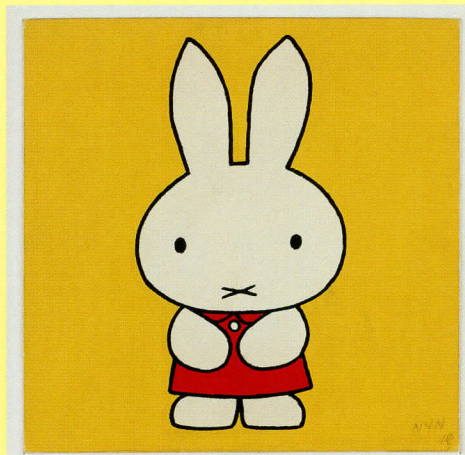
ロシアの古都サンクトペテルブルグ。運河が縦横に走り、北のベニスと言われるこの美しい街に、ロシア国立エルミタージュ美術館があります。かつてのロマノフ王朝の宮殿であり、ロシア・バロック様式で彩られたこの美術館自体が美術品と言われています。

ところで、「エルミタージュ」の意味ご存知ですか。フランス語で「隠れ家」を意味します。女帝エカテリーナ二世は、辺境の地に西洋文化をもたらす一環として買い入れた225点の絵画を、宮殿の小さな別館に納め、「私のエルミタージュ」と呼んだのです。「この宝物を、見ているのは私とネズミだけ」と語ったと言われ、彼女にとっては、心癒されるプライベートな空間だったのです。

この様にして始まったエルミタージュ美術館は、現在では、所蔵点数270万点以上と言われています。展覧会では、世界有数のガラスコレクションを有しながら、殆んど知られること無く、この隠れ家(?)に、そっと隠されていたガレやドーム兄弟など、ナンシー派アール・ヌーボー・ガラスのコレクションの全貌が、日本で始めて紹介されます。

その中から、1902年フランスからロシア皇帝ニコライ二世に送られたガレの最高傑作と言われる「花器《トケイソウ》」を紹介します。この作品は、蓋、花器、脚台と3部で構成されています。トケイソウは、その形から雄しべを木槌、雌しべを釘、副花冠を光背に見立て、キリスト受難のシンボルとされており、脚台の血の滴る茨と共に宗教的な意味合いを示しています。又、「もの言うガラス」とも言われ、ボードレールの「悪の華」の一説をアレンジした言葉が刻まれています。ガレは、様々な技法を生み出していますが、この作品の中でも、トケイソウや茨に木工の寄木細工にヒントを得たマルケトリール（ガラス象嵌）を見る事が出来ます。

ナンシー派の自然の草花や昆虫等をリアルに写しとった幻想的なガラスの森、散歩してみませんか。 [山上紹代]



《ちいさなうさこちゃん》(第2版原画) 1963年
Illustration Dick Bruna©copyright Mercis bv, 1963
www.miffy.com

50 years with miffy ミッフィー展

7月21日(金)～9月3日(日)

彼女のことを知っていますか?見たことがありますか?このとっても有名なうさぎの女の子は、50年くらい前に絵本の中で生まれました。彼女の名前はミッフィー。生みの親はオランダの絵本作家、ディック・ブルーナさんです。

ブルーナさんの絵本の中の「ミッフィー」は世界中の人々に愛され続けています。ミッフィーを描いてみて下さい。微妙な形の違い、目の大きさや、バランス、似ているけど、ミッフィーじゃないような……。1本のシンプルな線の難しさ。その1本を生み出すこと、描けば描くほど難しいことを実感します。そして色。最小限の色を使って、最大限の感情を表現する。見る側によって、気持ちを想像し、物語をふくらませてゆくのです。ただの絵本?いえいえ、奥が深いのです。

今回の展覧会は、初期から最新作の原画、貴重なスケッチ、創作風景、オリジナル映像なども紹介いたします。小さなお子さんはもちろん、年齢を問わず楽しめる展覧会です。ぜひ会場へみんなに愛されるミッフィー、そしてあなただけのミッフィーに会いに来て下さい。お待ちしております。(・x・)

[森糸えり子]

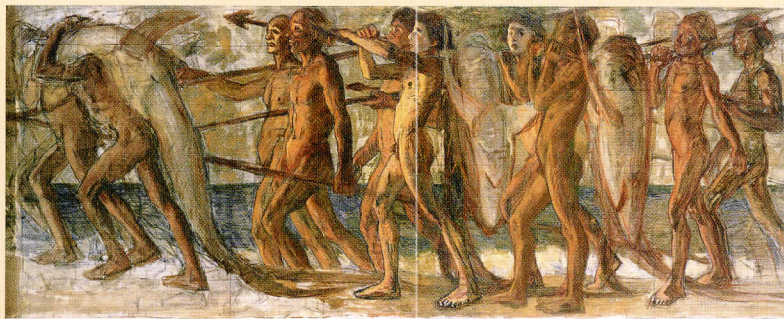
突撃 アートの晩ごはん

10

一九〇七年房総半島の布良海岸に友人、恋人福田たねとともに写生旅行に出かけ、漁師たちの生活にふれ描かれた作品。当時の布良は魚介類、海藻など豊かな漁場に恵まれ、捕鯨も盛んでした。海の幸という題名を見た時、神話的なものを感じ、魚好きの私は同じ名前の新鮮な魚料理を出す食事処を思い出しました。

神秘的で親しみやすく、荒々しさもあり、お祭が始まる予感：巨大な鱈（ふか）を陸揚げし、褐色の裸身の若者が長い鉤を手に魚を担ぎ、行列をなし意気揚々と帰って来る情景が伝わってきます。そして、浜辺は老いも若きも、女も子供も大漁の喜びに満ちた高らかな叫び声が聞こえてくるようです。これから大勢の古代人が火を囲み、採れたばかりの魚を料理し、歌や踊りの宴が延々と続く様が想像できます。澄み渡る青空と照りつける太陽、太平洋の黒潮が押し寄せる、大海原を吹き抜ける潮風、うねる波音、どこまでも続く水平線。

手を加える必要のない新鮮な素材を生かした料理。どのよう料理するのでしょうか。串にさし火で焼き、塩水で煮る、内臓をぬいて塩漬け、内臓で塩辛、背びれと尾びれは干してフカヒレ。フカヒレスープとヒレ酒戴きたいものです。現在問題になっている食品の安全性とは無縁の世界。最高の舞台。最高の賛沢。最高のばんごはん。



青木繁《海の幸》(部分)1904年 石橋美術館蔵

A 「ジェームズ・アンソール展」ギャラリートークを終えて [10.21-12.4]

アンソールのことは、2005年春のベルギー・ゲント美術館展でお初に知りました。しかし今回トークにあたり、改めてアンソールの人生をなぞってみると、なかなかドラマチック！若き頃、世に認められなかった作品群は、実は時代を

先取りし過ぎていた。そして、時代が彼に追いついたとき、人生の絶頂期を迎えた彼の作品はその力を失っていた…。一生を出身地で過ごした「仮面と死神」孤高の画家。案外、マイペース人間だったのかも？といろいろ想像して楽

しんでいました。トーク本番では、資料・史実に基に硬い説明になってしまっていますが、聞く人たちにも、自由に想像して楽しんでほしいです。そんな想像を促すようなギャラリートークを目指したいと思っています。

〔堀本真弓〕

B 子どものアトリエvol.7「影絵劇に挑戦」のアシスタントをして [11.27/12.4/12.10/11]

2005年12月の子供のアトリエは、4回目の最終日に影絵劇として妹や弟、お父さん、お母さんたちの前で発表する、というちょっと大掛かりなものになりました。

今回の参加は小1～小6の30名。普段は学校もクラスも違う子供たちなので、話を選んだり役割を決めたりみんなで協力できるかな？



スクリーン裏側の光景。

と心配しましたが、大丈夫。子供たちは登場人物や背景の仕掛け、人形の動かし方、ナレーション、とどろんどろろと工夫していきます。準備も練習も充分ではなかったけれど、発表当日はどの子も堂々と演技しました。みんな大人になってもこの影絵劇のこと、覚えてくれるかなあ。

〔三好ひさこ〕

C 茅野市美術館訪問記一神の降り立つ土地を訪れて [1.14]

まだ正月気分が抜けきらない1月、長野県茅野駅前の真新しい建物に移転したばかりの茅野美術館を訪問して来ました。各地記録的な寒さに見舞われたこの冬、前日に訪れた諏訪湖は昨年の内に全面結氷したとかで、湖面にせり上がった氷の道「御神渡り(おみわたり)」を見ることが出来ました。暖地高松で暮らす私には、湖面波打ち際の水が波の形のまま凍っているのを見て自然のなせる技に驚嘆しました。多目的ホール、図書館など、色々な機能を備えた複合文化施

設である茅野市民館は、その建物自体がガラス工芸品のような美しい近代的な建物で、その一角にある美術館も仕切りの壁が移動したり回転したり、まるで生き物のように変身するからくり箱のようでした。

美術館では学芸員の方や、サポーターの方々とゲームをしたり語り合ったり…雪を頂いたハケ岳山系と神の降り立った諏訪湖を背景に、この風土を後ろ楯にした茅野の皆さんの豊かな人間性と熱意に触れ、寒い土地で熱いものを胸に抱いて帰路につきました。

1999年1月に産声をあげてから丸7年、実はこの旅行、その私達の活動を、これからボランティア活動を開始される美術館サポーターの方々に紹介させて頂く為、茅野美術館のお招きに預かり実現したのですが、初心に帰ってこの7年を振り返り、馴れ合いになることなく、私達civilに何が出来たのかを改めて見直す貴重な旅となりました。心地よく迎えてくださった茅野美術館の皆さま、本当に有難うございました。

〔池田幸子〕

D 「昭和モダニズムの金工家たち 高松市美術館コレクション展II」ギャラリートークを終えて [1.20-2.5]

高松市美術館収蔵作品の中にこんなに沢山の金工作品があったことを皆様はご存知でしたでしょうか。今回は9人の作家とその作品60点余りが展示されました。

昭和初期にそれまで国内にはなかった全く新しいタイプの金工作品を生み出したアーティスト達がいました。彼らは当時ヨーロッパで流行していた、線や直線など幾何学的な構成を特徴としたアール・デコ様式を取り入れた奇抜なデザインの作品を発表しました。

その代表作家に香川ゆかりの作家が大勢いました。中でも今回は北原千庵の作品を多く展示いたしました。彼は彫金技法を取り入れた作品を数多く残しています。将来人間国宝にも成り得る程の技術を持ちながらも昭和29年、64歳の若さで惜しまれつつ亡くなりました。

今回の展覧会を通じて香川に沢山の優れた工芸家が居たこと誇りにしたいと思います。〔湊 節代〕



ギャラリートーク

高松市美術館コレクション

草間彌生「無題(金色の椅子のオブジェ)」1966年

ミクストメディア 60×64×83cm 高松市美術館蔵

これは何だと思えますか? 足のようなものが見えますが、動物でしょうか? これは、草間彌生のソフトスカルプチャ(柔らかい彫刻)と呼ばれているもので、《無題(黄金の椅子のオブジェ)》という作品です。

タイトルに「椅子」とあるように、椅子にびっしりと布の突起物が貼り付けられています。草間は、どうしてこんなヘン(?)なものを、作ったのでしょうか? この突起物は、男性器を模したものです。草間は性に対して、強い嫌悪感と恐怖感を抱いており、恐怖の対象となるものをいっぱい作って、その真ん中に寝転んでみると、怖いものがおかしなもの、おもしろいものにならな



恐怖感から逃れられたと言っています(『無限の網・草間彌生自伝』)。

草間芸術のキーワードは、反復と増殖です。少女時代から、幻視や幻聴に襲われ、それは網や斑点であったり、植物や動物の話す言葉が、聞こえてくるというものでした。これらの不気味なものから逃れる唯一の方法が、それらを紙に描き取ることであり、そうやって精神をコントロールしていたのです。キーワードの反復と増殖は、この頃から始まっていたと言えるでしょう。

恐怖感を表現の対象とした草間の作品は、強烈なエネルギーを発散しています。反復と増殖は、永遠、無限へとつながり、恐怖からの解放と、自己確認の作業なのです。「肉体は衰えても、芸術は永遠」という草間の作品に出会ったら、気持ち悪い(?!?)なんて言わないで、草間のエネルギーを感じて下さいね。[槇井真由美]

civi主な活動

'05

10.21-12.4 「ジューズ・アンソール展」ギャラリートーク(会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後(10.23は午前のみ)、開催回数のべ17回、参加者数のべ260名)…A

11.1 しびの一と12号発行

11.3 「スズキ・コージの仮面ワークショップ!」(講師:絵本作家、イラストレーター・スズキ・コージ氏)アシスタント…美術館日記参照。

11.27/12.4/ 子どものアトリエvol.7「影絵劇に挑戦」(講師:人形劇団ドリーム・河野美恵子氏)アシスタント…B

'06

1.8 茅野市美術館訪問…C

1.20-2.5 「高松市美術館コレクション展Ⅱ」ギャラリートーク(会期中毎日曜、各日午前・午後、開催回数のべ6回、参加者数のべ69名)…D

2.24-3.26 「蒔醤 磯井正美展」ギャラリートーク(会期中毎日曜・祝日、各日午前、開催回数のべ6回、参加者数のべ101名)…人間国宝・磯井正美氏によるめくめく蒔醤(きんま)の世界を紹介。

3.4 アートで遊ぼう(講師:香川県指定無形文化財保持者・山下義人氏、当館学芸員・川西弘一)アシスタント…山下義人氏による蒔醤のお話。実制作者ならではの説得力のある技法解説と、漆芸によせる同氏の熱い想いに一同感嘆。

3.4/11/12 子どものアトリエvol.8「さぬきの伝統・うるしに挑戦だ!」(講師:山下義人氏)アシスタント…「蒔醤 磯井正美展」関連企画。漆の面を彫り、色漆(今回は車用塗料)を埋め、研ぎだす蒔醤(きんま)の技法に小5-中3生が挑戦。蒔醤剣で試し彫りをさせてもらい、その扱いの難しさを実感。

野をこえ山こえ(学芸員は)どこまでも—アウトリーチの取り組み

アウトリーチ(outreach)って言葉。本来の意味は、「手を伸ばすこと」とか「届こうとすること」ですが、美術館でも、日頃、美術に触れる機会の少ない人々に対して、積極的に働きかけを行うこのアウトリーチ活動がさかんになってきました。

例えば、当館の牧野学芸員がボランティアciviのメンバーと一緒に老人大学へ出向き「アート・ゲーム」を紹介する中、年配の方々に「こんな風にも、美術って楽しめるよ」ということを伝えたり、詫間小学校と2年に渡るインターネット回線を用いたテレビ会議で、彼がここ[美術館]と子どもたちのそこ[学校]とを展覧会を介して行き来するなど、アウトリーチの姿形にはいろいろあるわけです。私も、過去フリースクールと呼ばれて、公園で「秋を見つけよう!」とフロッターージュに興じたり、聖書をテーマにした作品のパネルを見て、ストーリーテラーとしてそれぞれの創造・想像の翼を広げてもらったりしました。ごく最近では、育児サークルからの依頼で、「出前トーク」に出かけ、小さなお子さんを抱えたお母さんたちに、高松市美術館での子どもを対象にしたプログラムがあることや大原美術館(倉敷)での画期的な就学前児童へのプログラムなどを紹介して来ました。そして、当館でも就学前の子どもたちのプログラム実現に向けて意欲的であること、その折にはお母さんたちにもぜひ力を貸してほしいことを伝えました。今回は、三豊市Y小学校に行き、先生方と鑑賞をめぐるお話の時間を持つことになりました。子どもたちに一番近い存在である先生方には、教室でも使えるアート・ゲームを引っさげて、美術の楽しみ方の一端を紹介したいと思います。「鑑賞」が指導要覧に織り込まれ「鑑賞教育」に大きな関心が寄せられる昨今ですが、まずは先生自身に「鑑賞は面白い」と実感してもらいたいと思います。

アウトリーチを通して、これまでの美術[館]での経験を伝え、作品を鑑賞する喜びを共有することになればと思います。美術館の活動が広くみなさんの知るところとなり、美術館を魅力あるサイトのひとつとして認識してもらっていれば、みなさんにとって美術[館]が必要となつて届こうとするその時に、美術[館]に手が届き本物の作品と向き合うことができると信じています。そのために私たちは、呼ばれればどこへでも美術館普及のために出向きたいと思っています。[高松市美術館学芸員 毛利直子]



▲インターネットを用いたテレビ授業の風景

*高松市美術館ホームページ内に「学校との連携」コーナー(<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/3931.html>)があります。いちど覗いてみてください。

わき役、わき役と言っておるが、わしの事かね。わしはれっきとした絵の中心におるし、すべての事を見てきた主役のはずなんじやが。まあ物も言えぬ鏡じゃからわき役でもしょうがないがね。

いまから570年も前の事じゃが聞きたいというなら話してしんぜよう。

このお二人はな、アルノルフィニゴ夫妻で今結婚されたばかりじや。誰だね、できちゃった婚だなどと言っておるのは。奥様のお腹が少々大きいのは当時のネーデルラント（今のベルギー）の流行で、ふっくらした腹部が美の基準だったのじや。緑色は献身や多産を意味しておるが、お気の毒にお二人には子供はできんかった。

ご主人様はワリア生まれの裕福な商人でネーデルラントに移ってからは宮廷の重要な地位におられて、この服装も宮廷の流行なんじや。地味に見えるが毛皮を使った高価なものでな、他にもガラス窓や輸入物のオレンジ、ベッドの下に絨毯（じゅうたん）などでもお二人の裕福さと地位がわかるのじ

や。このわしもかなり高価なものでな、まわりにはキリストの受難が細かく描かれておる。凸面鏡には二人の人物が写っておるが見えるかね。その内のお一人がこの絵の生みの親のヤン・ファン・エイク様じや。当時は証人が二人おれば自分の部屋でも結婚できたのじや。今のように派手なら結婚をする人に見てもらいたいもんじや。他にもローソクが一本だけついておるのがわかるかね。これはすべてを見通す神の眼を表しておる。

サンダル、犬、二人の手のポーズ、ロザリオ…全てに意味があるんじやが時間が足らんからまた今度じや。

ここまで緻密な描写ができたのも、油彩技法によるからじやが世間ではファン・エイク様が油彩技法を完成させたと言っておる程じや。

今でもこの絵に関してはいろいろな説が出ておるから、あんたも謎解き

第2回

わき役 のひと りごと。

←今回のわき役



図版：ヤン・ファン・エイク《アルノルフィニ夫妻の肖像》1434年
ロンドン、ナショナルギャラリー蔵

をしてみなかね。新発見があるかも知れんぞ。

〔吉田光子〕

参考資料：『世界名画の謎』ゆまに書房／『西洋美術鑑賞解説図鑑』東洋書林／『週刊アートギャラリー52』ディアゴスティニ

美術 日記

2005年8月2日（火）・3日（水） 美術館がペーパーテント村にへんしん？変身！

美術館に子どもたちのにぎやかな声がこだました8月2日・3日。この2日間に15個のいろんな形をしたテントが美術館のあちこちに出現しました。（…）もちろん、子どもたちも、新聞紙だけでテントを作るなんて初めてのことで。新聞紙を固く丸めて支柱を何十本も作るって、単純といえば単純な作業なのですが、小さい子どもたちにはなかなか難しい。（…）それでも、みんな、ワークショップの最初に誓った約束を果たそうとがんばりました。その約束とは、（1）ここ美術館で初めて出会った友だちやリーダーと仲良くなること。（2）美術館の中をグループで探検して、どこかのサイトにテントをはるのか、そして、どんな形のテントにするのか、よく話し合って決めること。（3）そして、みんなで協力しあい、グループの全員が入れる大きさのテントを作ること。（4）出来上がったら、ほかのグループのテントを見て回って、良いところを褒めてあげること。

（…）各テント作りには、それぞれのドラマが生まれました。ほとんど倒壊してしまい、作り直したり、また場所の性格上その日のうちに自分たちで壊さなければならなかったチーム。テントのスケールが大きすぎて、結局屋根が貼れなくて、空が見えるテントだと納得せざるを得ないチームなどいろいろ。みんなどんな思い出を持ち帰ったのだろう（…）（メルマガもって高松60号2005年8月19日発行より抜粋）



▲ペーパーテント村住人

2005年11月3日（木・祝）スズキ・コージの仮面ワークショップ！

アンソール展開連企画として、カリスマの人気を誇る絵本作家・イラストレーターのスズキ・コージ氏を講師に招き、仮面をみんなで作るワークショップを開催。前日、スズキ氏から送られてきたろうけつ染めの幕や、切り紙による旗などを室内に飾り、会場作りをしたのですが、当日朝、スズキ氏は来るなり、「外でしょうよ」とご提案。内心、「えっ!？」と思いながらも、参加者全員で屋外のスペースに飾り付けや材料・道具一式の大移動です。でも結果的には、屋外でのワークショップは気持ちがよく、大正解。

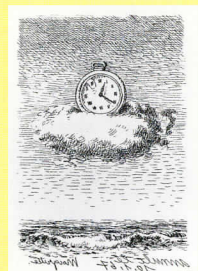
「僕の仮面のまねだけはしないで。あとは自由に作ってください。それでは、はじめ!」のスズキ氏の掛け声でWSは開始。段ボールに彩色やコラージュを施しての仮面作りが終わると次はパレード。メガホンで雄叫びを上げるスズキ氏を先頭に、みんなで仮面をかぶり笛やタイコを派手に鳴らしながら、近くの商店街を練り歩きます。異様な仮面の行列はまさにアンソールの世界そのもの。子供たちはノリノリで楽しんでくれたようでしたが、仮面は視界が悪く、パレードをするのは実は大変だったようです。アンソールの世界を実際に体験してもらおうという意図で始まったこの企画。仮面は楽しいけど疲れる、というのが私の感想なのですが、みんなはどうだったのでしょうか。〔牧野裕二〕



▲参加者と共に仮面作りに興ずるスズキ・コージ氏

2006年2月4日（土）アートで遊ぼう「アートでハイク、カルタ」

まずは「高松市美術館コレクション展Ⅱ」出品作品を印刷したカードを使っの神経衰弱。参加者の小学3-6年生はどれもはじめて見る作品なのに、次々とカードをゲット。私は完成してしまいました。（しかし、神経衰弱というのは、意外な人が熱くなるものです）次に、展示室に行き、カードに印刷してあった作品の実物を前に、私のほうからギャラリートーク。そして部屋に戻り、各自気に入った作品を選んでもらい、それについて俳句もしくは川柳を考えてもらいました。俳句はどれも、作品から受けた感想を見事に5・7・5で表わっていて、なかなかの力作ぞろい。なかでも印象に残ったのが、ある女の子によるマグリットの作品を詠んだ次の一句です。「海の上 時間が流れ くもうごく」〔牧野裕二〕



▲ルネ・マグリット
「対蹠地の黎明・無題」
1966年 高松市美術館蔵

お問いあわせ

高松市美術館 ボランティア係
〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 TEL087-823-1711 FAX087-851-7250
高松市美術館ホームページ <http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/647.html>
展覧会やワークショップの案内など、最新の情報を満載! いちど、のぞいてみてください!

利用案内

【開館時間】
火～金：9時30分～19時
土・日・祝日：9時30分～17時
(展示室の入室はいずれも開館30分前まで)

【休館日】
月曜日(ただし、休日と重なる場合はその翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)